



国民の森林・国有林



改良工事中の内大臣橋

【熊本森林管理署】当署管内にある内大臣林道の緑川に架かる内大臣橋は、熊本県と宮崎県にまたがる国有林の森林資源開発のために昭和36年に着工し38年に竣工した橋で、当時の価格で約1億5千万円

の経費を投じて架設し、橋長は200m(幅員5.5m)、水面からの高さは88mあり、当時は東洋一のアーチ橋と言われ国有林のみならず地域住民の生活道として大変重要な橋として利用されています。

点検の結果に基づいた補修工事と塗装塗替工事を、平成29年度と令和元年から2年度に分けて実施し、この度点検結果に基づいた内大臣橋に係る全ての改良工事が完成しました。

これまで昭和45年及び平成元年に塗装塗替工事を、平成11年から12年度には現在の橋梁規格に適合した欄干の嵩上げと転落防止対策、塗装塗替工事を実施しました。また、平成28年熊本地震発生後に実施した橋梁

この工事の完成に伴い、当署としては内大臣橋が将来にわたり国有林のみならず地域住民にも貢献していく重要な橋であること、また未来に引き継ぐ林業遺産としての価値も大きいことから、今回の改良工事の完成を一つの節目として内大臣橋の重要性と国有林野事業の取組、そして熊本地震からの復旧を具民にPRするため、落成式を9月14日に現地において開催しました。落成式には、地元の上田泰弘美里町長、能登哲也山都副町長をはじめ関係警察署や消防署、地元区長の来賓に加え、平成29年度と令和元年から2年度に工事を受注した大政建

設(株)と岩田建設(株)の関係者、また九州森林管理局から小島孝文局長、久保芳文森林整備部長、木林静夫森林整備課長ほか林道事業担当者が出席し、当署関係者を含め総勢37名の出席のもと開催しました。落成式は、下大迫伸一総括森林整備官の司会進行により溝越啓二次長の開式の言葉で始まり、川畑充郎署長の式辞



挨拶する小島局長

内大臣林道改良工事(内大臣橋)落成式を開催



落成記念植樹の様子

その後、小島局長が「林業や住民の生活にとって大切なインフラであるこの内大臣橋をこれから大切に守っていくとともに、九州各地で多くの自然災害が発生している中で九州森林管理局として地域貢献できるように様々な取組を進めて参りたい」と挨拶、上田町長と能登副町長から来賓挨拶、岩田龍裕岩田建設（株）代表取締役から施工者挨拶を頂きました。

また藏原剛主任森林整備官と岩田建設（株）の雑賀光一現場代理人が、工事の概要説明を架設当時の写真も交えながら説明した後、参加者全員で橋の中央部に移動して360度のパノラマで大自然が広がる素晴らしい景色の中で心地よい秋風を感じてもらいな



参加者全員で記念撮影

から、実際の工事状況を見学して頂きました。

続いて落成記念植樹として、内大臣橋が美里町及び山都町の発展と友好の架け橋となるように両町の木である「もみじ」を、美里町側に能登山都副町長、小島局長、森山大政建設社長、山都町側に上田美里町長、川畑署長、岩田岩田建設社長が植樹を行うとともに、最後に参加者全員で記念写真の撮影を行い落成式は無事に終了しました。

なお、今回の落成式の模様は、マスコミの取材を受けテレビ、新聞で報道され、当署及び国有林野事業の取組と熊本地震からの復旧をPRするとともに、地元との絆を深めることとなりました。



寺田指導官の説明を受ける様子

「未来のリーダーが学ぶ」みやざき林業大学校が研修を実施、
【宮崎南部森林管理署】みやざき林業大学校（長期課程）は、県南の林業研修として9月23日～25日にかけてサテライト研修「県南の林業」を実施し、23日に当署の三ツ岩オビスギ遺伝資源希少個体群保護林と林分密度試験林の見学研修を行いました。

当日は、林業大学校研修生20名、研修指導員6名、職員2名計28名と、南那珂農林振興局から菓子野南那珂農林振興局長、山村林務課長、高島副主幹、当署から3名合計34名で実施しました。



木のミステリーサークル見学の様子

その後、近年なにかと話題になっている林分密度試験林（通称：木のミステリーサークル）に移動し、設定目的、設定方法等について説明を受けた後、円形試験地の中心地で上空の空間の様子や、植栽密度による径級の違いや下層植生状況を見学し、植栽の適正本数などについて質問があり、関心の高さが伺われました。

みやざき林業大学校は、全国有数の林業県である宮崎県

三ツ岩オビスギ遺伝資源希少個体群保護林では、当署の寺田雄一郎森林技術指導官から概要説明等を受けた後、巨木の林内を散策しながら、オビスギの特徴等を説明しました。

受け入れは甲斐誠一森林技術指導官と白石裕次主任地域林政調整官が窓口となり、署内及び森林事務所職員の協力を得ながら、民有林との連携や生物多様性の保全、主伐・再造林について、さらに森林保護（獣害対策）や森林土壌事業等について現地実習を交え、幅広く当署の業務について学習してもらいました。

特に現地実習では、内大臣林道（内大臣橋）の検査体験や熊本地震で被災した森林の復旧を進めている治山対策、

の将来を担い、未来のリーダーとなる人材育成を目的として、森林・林業の基礎から実践的な知識・技術を習得することから、今後期待される場所です。

みやざきの森林が、「新たな林業の担い手」として若い力を待っています。

令和2年度（夏期）インターシップを受入れ
【熊本森林管理署】当署では9月8日～9月11日までの4日間において、九州工業大学から1名の令和2年度（夏期）の農林水産省就業体験実習（インターシップ）を受け入れ、当署の業務内容等について体験実習を実施しました。



内大臣林道（内大臣橋）検査実習の様子



シカのくくり罠設置実習の様子

深刻化するシカ被害対策等については、実際にくくり罠の設置方法を体験し大変関心を示していました。

実習生からは、「初めて聞く用語と経験したことのないことが多く、今回の実習を通じて国有林の業務内容について知ることができとても参考になった。国有林の技術を民有林に普及していく重要性を感じた」などの感想を頂き、今回の就業体験実習が今後の進路や研究に活かされることを期待されます。

協定に基づく鹿児島大学 屋久島実習を実施

【屋久島森林管理署】九州・沖縄地方で林学系の専門コースを有する5大学と締結した「連携と協力に関する協定」に基づき、9月15日から17日まで鹿児島大学と連携して学生実習を実施しました。

農学部農林環境科学科2回生31名、4回生4名、3回生1名、大学院生1名に対して、15日は安房野木十場において、



シカ罠を設置する実習生



石本 健一さん

国有林について理解を深めたいと思い、国有林モニターに応募しました。日本の国土の約7割が森林におおわれ、その内の約3割が国有林です。国有林は全国各地に、多くは急峻な奥地の山々や河川の源流などに分布しています。そのため、国有林は土砂崩れなどの防止や、水源の維持など、

国有林への関心をもちよう

国土保全に貢献しています。また、野生動植物の生息地、生育地でもあり、使用する国産材の2割は国有林で生産されています。

「ぎ」、心身の「リフレッシュ」を与えてくれることだと思えます。新型コロナウイルスの影響で、人との接触や外出を制限されていますが、こんな時こそ森

整備しにくい環境ですが、整備する兼ね合いも難しいところもあると思います。調べてみますと、森林総合監理士（フォレスト）の育成についての

このように国有林は重要な役割を担っています。が、一番の貢献は私たちに「うるおい」や「安ら

林に向いて心身の「リフレッシュ」を図ることも、有益だと思います。国有林はその立地上、

市町村の森林・林業行政を支援する人材ということとです。具体的には、①長期的、広域的な視点か

国民の財産である国有林について多くの人に心をもちてもらい、様々な活動を行うなかで森林の活用を図りつつ、豊かな森を後世に引き継いでいけるよう希望しています。

（大分県在住）



柴崎准教授による集落跡の説明を受ける様子

の加工・流通や材の活用状況
を学ぶために、有水製材所、
武田産業、屋久島地杉加工セ
ンターや屋久島町木造新庁舎
等を訪問して各担当者から説
明を受けました。

当署としては、引き続き協
定を締結している九州内の各
大学や関係機関との連携・協
力を強化しながら、人材育成
や研究フィールド提供など様々
な取組を実施していく考えで
す。

森林保護員による保全活動 (秋期)がスタート

【大分・大分西部森林管理署】

9月10日、大分県九重町の
牧ノ戸峠(標高約1300m)
において、令和2年度秋期
(9月10日～11月30日)森林
保護員(大分署5名・大分西
部署4名)による保護活動の
出発式を行いました。

はじめに、大分署・大分西
部署を代表して、猪島明久大
分森林管理署長から、「前期
は、新型コロナウイルスや、
豪雨の影響により十分な活動
が出来なかったが、これから
秋の行楽シーズンを迎え、多
くの登山者が見込まれます。
引き続き、高山植物の保護・
山火事の防止・登山マナーの

啓発に取り組んでいただくよ
うお願いしたい」との挨拶の
後、巡視ルートの確認、安全
確保の打ち合わせや装備の点
検を行いました。

森林保護員は、11月までの
約3ヶ月間、久住山や大船山
などのくじゅう地域の国有林
をフィールドに登山マナーの
啓発、標識や登山道の状況把
握などを実施します。

くじゅう連山は、これから
秋が深まるにつれ赤や黄色の
色鮮やかな風景が楽しめます。
この大自然を満喫していただ
くために、保全活動を通じて
登山者に満足いただけるよう
取り組みます。



猪島大分署長の挨拶を受ける森林保護員の皆さん

令和2年度 第2回国有林材供給調整検討委員会開催

「現時点での供給調整は 要しない」との検討結果

9月24日に、本年度第2
回目の「国有林材供給調整
検討委員会」を開きました。
各委員がそれぞれの専門
分野からの意見を述べ、あ
い「7月豪雨災害などによる
原木供給不足により原木価
格は元に戻りつつあるが、
製品については動きがみら
れないことから、今後の需
給見通しは依然として不透
明な状況が続いている。

このため、追加の供給調
整は行わず、国内の住宅着
工戸数や地域の木材の需給
動向等を見極めながら、当
面、現在の供給調整を継続
していくこととする」との
検討結果となりました。

各委員からの主な意見は
次のとおりです。
○合板業界においては、
3月に市場に合わせた減産
を表明して以降現在も継続
中で、1月から7月までの
合板生産量は対前年比で90
%と住宅着工戸数の減少幅
と連動した生産となってい
る。減産体制の中でも、需



挨拶をする小島局長



遠藤日雄委員長を座長に検討会が進行

並み減産傾向で推移している。

自社工場では新型コロナウイルスの影響で工場の操業短縮の状態にあったところに九州豪雨災害による球磨川氾濫等の影響や、台風による製造機械の突発運転休止があった。チップ関連では製紙工場各社減産基調により製紙用のチップ生産量が減少している。

禍によるライフスタイルの変化によるマンションから戸建てへの需要の変化など少しでもプラスになればと期待している。

アメリカの住宅着工が好調なことから、製品輸入が不安定な状況にあり、国産材のシェア拡大を期待したいところであり、さらにはアメリカへの製品輸出を考えるべき状況である。

コロナによって全てがマインスというわけではなく、今回のピンチをチャンスと捉えて新たな需要拡大に力を入れていく必要がある。そのためにも原木の価格と供給量の安定が重要である。

○長雨や台風の影響により、原木の供給が滞っており、都市（宮崎県）の原木市場の記念市でも半分ほどの出材しかない状況も見られ、原木不足から価格については持ち直している。

周辺製材工場では土日・祝日は休んでおり、製品販売については売上材積が1割減、価格も1割減となっており、売上の減少と上額としては2割減少しており製材工場は大幅な赤字となっている。一方で、9割の工場が原木の品薄状態となっている。

輸出についてはフェンス材の製品注文が多いようである。一方、輸入欧州製材品についてはスギ集成材への転換等から、商社の在庫の投げ売り等が見られる。

○新型コロナウイルスの影響のあ



検討会の様子

の減少という問題から、住宅着工戸数が、この先5年後10年後には50万から60万戸程度になるのではと危惧している。

今後の期待する部分として、輸出についてはこのような厳しい状況下においても、原木では昨年を上回る数量を見込んでおり、製品としては、商社を通じてアメリカ向けのフェンス材の引き合いも出てきている。また、バイオマスについても、ここ1年ほどで取扱量を増やして欲しいとの要望が多く上がっている。

○最近まで新型コロナウイルスの影響で材を止めてほしいとの状況であったものが、今回の7月豪雨で状況が一変した。価格も元に戻り、九州の一部地域では暴騰するところもあったが、8月に入ってから落ち着いていく。年末に向けて出材が減る様な事は無く安定的に供給されていくと思うが、そうなる材価が下がることは目に見えている。しかし、山側においては供給する側と受け入れる側のお互いの信頼関係に基づいて安定供給に頑張ろうと動いている。

○新型コロナウイルス前は、経営が安定している森林組合では森林整備から木材生産に重きを変えて安定した原木供給を行っていたが、新型コロナウイルス以降は、行政からの要請、価格の下落を受けて木材生産を伴わない森林整備事業へ転換する取組を行ってきた。

木材市況では、大径材について、非常に売りづらい状況が続いていたが出荷量が減ったため、大型工場や製材所からの引き合いで出てきており、40cmくらいまでなら値段も戻ってきている。

※本検討委員会は、九州森林管理局HPの注目情報「九州森林管理局国有林材供給調整検討委員会の検討結果等について」からご覧になれます。

（担当）地域木材
情報分析官

安全会議 電動刈払機研修会を開催

【熊本森林管理署】当署では、安全管理担当者を対象にした安全会議を四半期毎に開催していますが、第2四半期の安全会議については、本年度新たに導入した電動刈払機（機種・ECHOPバッテリー刈払機）の伝達研修として、安全管理担当者のほか使用希望職員も含め25名が参加して9月28日に開催しました。

研修会は、溝越啓二次長、濱田祥吾森林整備官、城邦典



学科講習の様子

森林技術員を講師として、午前中は署会議室において電動刈払機の構造や取扱方法、安全作業に関する注意事項等に関する学科講習を、午後からは阿蘇深葉国有林の水源林道（深葉側）沿線においてバッテリーや刈刃のセット方法、起動方法等の基本的な説明を受けた後、受講者全員が実際に電動刈払機を使用した実技講習を行うとともに、城森林技術員から刈刃の目立て方法について指導を受けました。当署としては研修終了者には修了証を交付し、林道や歩道等の簡易で部分的な刈払いや庁舎等の環境整備等で臨時



実技講習の様子

このような中9月18日に、本年度の現地調査を開始するに当たり、署、森林生態系保全センター関係者13人と鹿児島大学4回生1名が参加して林業遺産に関する情報共有や今後の対応方針等を検討するため、国立歴史民俗博物館の柴崎茂光准教授と鹿児島大学の奥山洋一郎助教の指導を受けて現地検討会を開催しました。

当日は雨の中、検討会は船行森林事務所部

林業遺産現地 検討会を開催

【屋久島森林管理署】当署の国有林野内にある森林軌道や事業所、宿舎、小中学校跡、さらに屋久島の林業を記録した古写真等については、平成29年5月に日本森林学会より林業遺産「屋久島の林業集落跡及び森林軌道跡」として認定されています。

的に電動刈払機を有効活用してもらい、職員の現場業務が安全にそして負担軽減となるように取り組んでいく考えです。



柴崎准教授による説明の様子

道がダム湖に入るところまで調査を行った後、ダム管理事務所まで戻ってから質疑応答を行い現地検討会が終了しました。当署としては、今後とも関係機関や研究者と連携しながら認定された林業遺産を適切に保全して、後生にその価値が受け継がれていくように努めていく考えです。

内の太忠嶽国有林内の屋久島電工尾立ダム管理事務所敷地内で開催し、冒頭西純一郎署長からの挨拶後、柴崎茂光准教授から林業遺産全般についての説明を受けました。最初に尾立ダム下流にある大正時代に敷設された森林軌道跡の説明があり、次に炭窯跡及び集材機等の遺構の説明、一時間歩いた後、島内でもあまり残っていないインクライン跡の説明を受け上方から下方にかけて約200mのインクライン跡の踏査を行いました。



現地検討会の様子（インクライン跡）

九大インターシッパで 国有林を学ぶ

【福岡森林管理署】9月28日から30日にかけて、九州大学農学部・生物資源環境学科3年生の黒岩竜大さんと中島晃也さんに、インターシッパを実施しました。

担当する職員が講師となり実施しました。1日目は、福岡署の国有林概要と重点取組事項を説明し、その後、現地へ出向き豪雨等により被災した国有林を復旧する治山事業・林道事業の現状について学んでもらい、小石原森林事務所管内の保護林（行者スギ）についても林内に入り観察してもらいまし



風致探勝林の巨樹の前で

2日目は、午前中は松くい虫被害対策と海岸林再生のための取組について、午後からは地域との連携によるシカ被害対策について学んでもらいました。

3日目は、森林整備事業（保育間伐・活用型）の現場において国有林における森林整備の目的などを説明した後、立木の伐倒や林業機械による集材状況を間近で見てもらい、「大学で学んでいたが、現地作業を見るのは初めて」とのことでした。午後からは、太宰府森林事務所管内の若杉山風致探勝林（日本美しの森）お薦め国有林）において森林セラピー道を散策し、巨樹等の管理について学んでもらいました。

最後に署長室において、佐藤署長から学生に対し、「人口減少社会の中で森林・林業を発展させるためには、公共だけではなく民間で国産材



さつき松原で一山地域技術官が説明

を利用した建物を増やしていくことが重要である」との総括があり全日程を終了しました。今回のインターシッパにより国有林野の業務にさらに関心をもっていただき、2名の学生が当職場を希望されることを期待しています。

高山植物保護等のため くじゅう連山をパトロール

【大分西部森林管理署】9月29日、当署が事務局を務める「くじゅう地区高山植物保護対策協議会」の活動として、くじゅう連山で高山植物保護等のためのパトロールを行いました。

例年、協議会の会員である九重の自然を守る会等から広く参加を得て行っていました。今年度はコロナウイルス感染症対策のため、規模を縮小して事務局である当署の職員とグリーンサポータースタッフにより実施することとし、大分県九重町の牧ノ戸峠を出発地として、扇が鼻方面に至るルートと、黒岩山・泉水山を経て長者原に下りるルートを実行しました。今年度は登山客へのチラシや山マナーの配布も見合わせ、登山マナーの向上の呼びかけも最小限に留めながら、高山植物の生育状況や看板・標識類の状況を点検しました。幸い、高山植物の盗採等は見られず、看板類の設置状況も概ね良好でした。また、パトロールに兼ねてグリーン活動も実施しましたが、近年の登山マナーの向上もあって、ゴミもほぼありませんでした。くじゅう山では、リンドウ



パトロールの様子



などが可憐な花を見せていたほか、ミヤマキリシマの生育状況も概ね良好であり、好天に恵まれた秋空の下、紅葉が始まる気配も感じながら、安全にパトロールを実施することができました。署では引き続き、豊かな自然に恵まれたくじゅう連山の国有林の保全に向けて、グリーンサポータースタッフによる巡視活動や、ミヤマキリシマの刈り出し作業等の活動を展開していくこととしています。



155 チシヤノキ (ムラサキ科)

都会の中の憩いの森
 監物台樹木園の
 多様な植物

一昔前、九州森林管理局への通勤で、京町から局の間の京陵中学校の周囲の石垣に、春になると楕円状披針形の葉が芽を出してくる。これは何の木だろうと調べたらチシヤノキだった。カキノキダマシの別名で有名であるが、一般の解説では葉が似ているからと解説され



る、葉は鋸歯があるのがチシヤノキである。その点を注意すると間違うことは無い。

調べているうちに「チシヤノキの異名であるカキノキダマシは、葉に対してではなく、樹皮である」との解説を知り、納得したことを思い出す。

昭和30年、後半は、「戦後」が終わり高度成長期に入っており、嫁入りダンス（今では死語？）の高級品にはキリ、ケヤ



キ、カキノキ、チシヤノキなどの原板の板（箆筒の前板）が使われ、持ち主はそれを自慢していた。現在80歳を超える人の嫁入りダンスには、そんな貴重な箆筒があるはずだ。水前寺湖の周辺を春に散歩すれば目の高さで、葉、花、果実とチシヤノキを細かく観察することができる。もちろん樹木園でも観察できる。

森林インストラクター
 安楽 行雄



四月に九州へ来てから何度か山に登っているが、その度に違和感を覚える。熊鈴の音が聞こえないからだ。北海道で登山を知った私にあって、熊鈴は山に入る際の必須アイテムだった。しかし、クマが絶滅した九州では、熊鈴が必要とされないうちにも道理か▼さて、そのクマであるが、人間とのトラブルがしばしば報じられている。クマが建物に侵入したり、キャンプ客に怪我を負わせたり、これらの事故は人とクマ双方にとって不幸でしかない▼クマに限らず、野生動物と人間との間には、農林水産業被害や交通事故、土砂災害の誘発など様々な問題が発生している。日本の森林管理に携わる者として、これらの軋轢から目を背けてはならないと思う。林業に直接関係の無い問題についても、もっと積極的に関わっていきたい▼冒頭の話に戻るが、熊鈴は登山者の位置を知らせる役割もあり、狭い登山道ですれ違う時に役に立つ。山に登る機会があったら、是非付けてみて欲しい。

【B】